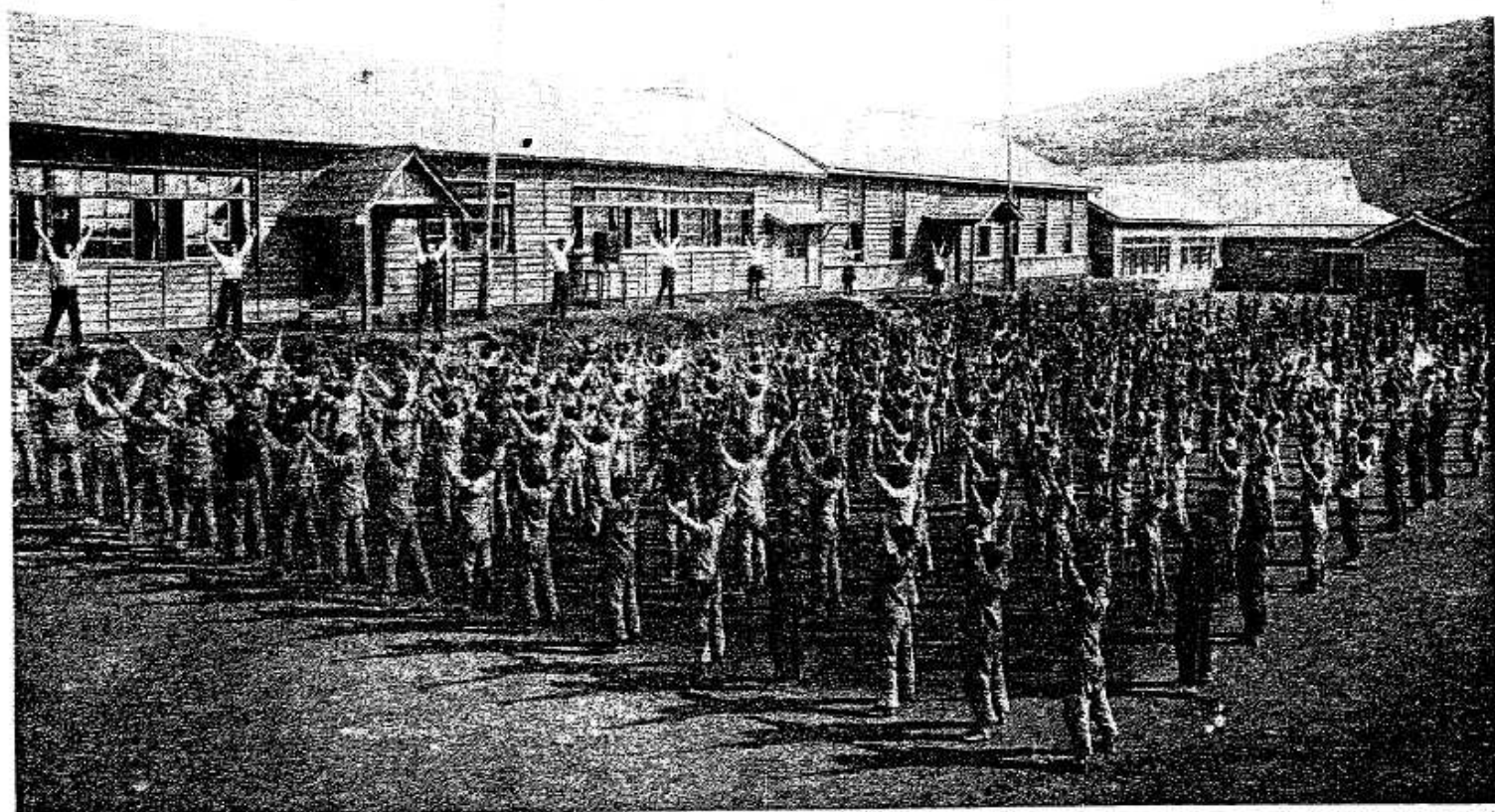




昭和初期のラジオ体操で校庭

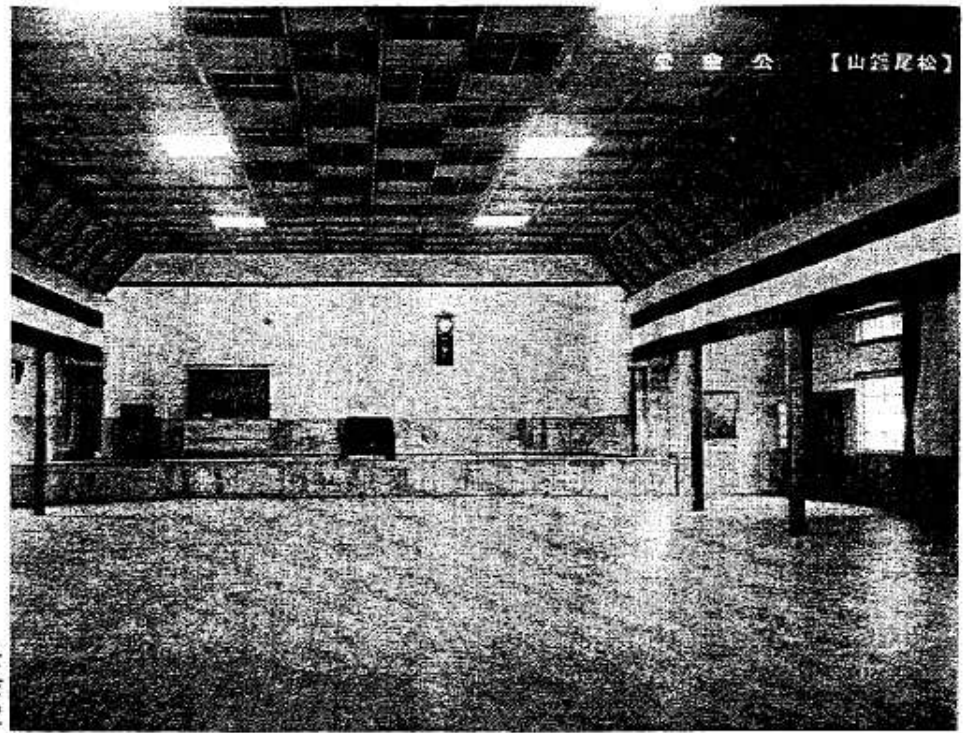
## 松尾鉦山学校小史

藤原 仁左衛門

松尾鉦山に学校ができたのは、大正五年六月一日で寄木小学校元山分教場として、大通りの鍛冶小屋を仮校舎として開かれたといわれる。場所は現在労働会館（松尾鉦山労働組合）の建っている附近である。児童数は三九名。全部あわせて一クラス。教員は六月一日着任の本科正教員松尾景行先生ただ一人。翌六年四月一日東北高女（現白百合学園高校）卒の松尾ソノ先生着任。職員二名で二年级となる。四月一六日には私立松尾鉦山尋常小学校の設置が認可され、独立の小学校ができて六年生までの生徒が勉強できるようになる。

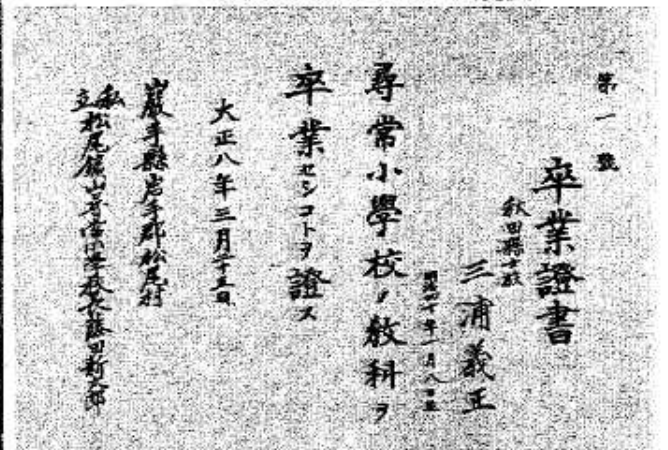
大正一五年四月一日には高等科を置き、尋常科六年を出て更に二年間勉強できるようにした。高等科は義務教育ではないので六年生をでるとすぐ働くものが多かった。しかし向学心に燃える者の希望をみたすことのできたことは、後の鉦山発展に寄与することともに意義の大きいものがあつた……。昭和一四年四月一日屋敷台（今の柏台）に分校をおいた。昭和一六年四月一日日本の小学校は国民学校と名を改め、鉦山の学校も私立松尾鉦山国民学校と改称した。この年の一月二八日にはアメリカ、イギリス、フランス等世界の国々を相手に太平洋戦争に突入した。

戦勢もきわまった二〇年、松尾鉦山もアメリカ軍の爆撃を受け、講堂を破壊炎上する等甚大なる被害を受けた。このようにして終戦



公会堂

小学校卒業証書の第1号＝大正8年  
(元機電課勤務三浦義正氏提供)



卒業証書授与＝昭和15年3月

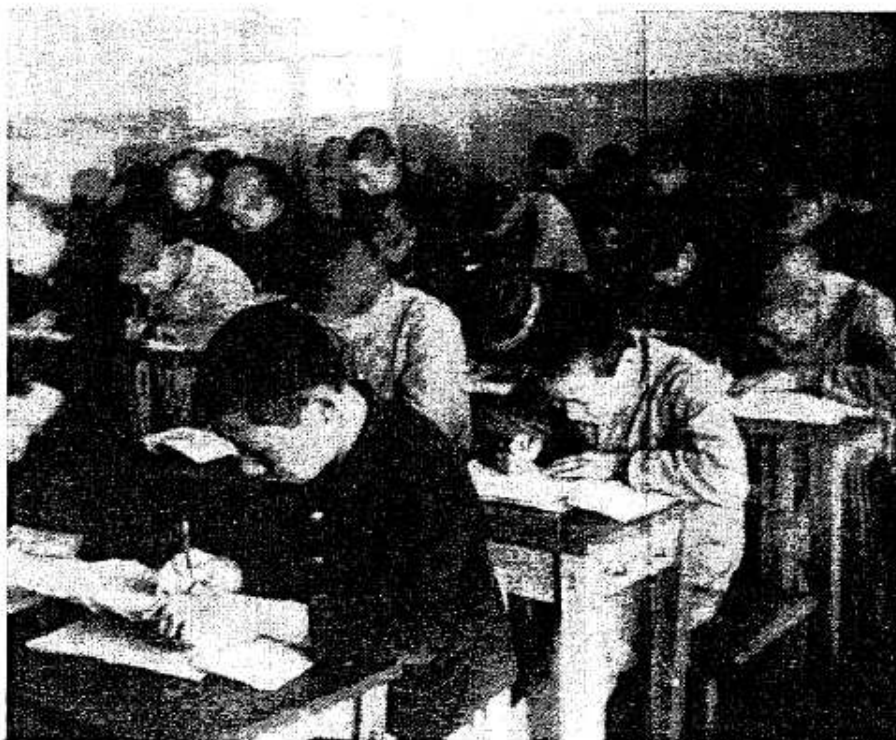


を迎えたのである。二二年四月一日より国民学校は六年までは小学校とかわり、高等科は廃し修業年限三年の中学校となった。所謂六三三制の新しい教育制度ができるのである。

松尾鉦山国民学園も私立松尾鉦山小学校と私立松尾鉦山中学校の二校となり、校長は両者とも佐藤要一郎先生である。開校時の私立松尾鉦山中学校は三年生一クラス（男女共学）二年生と一年生は男女各一クラスの合計五クラスだった。（屋敷台の分校を除き本校分のみ）翌二三年には一年生が共学の三クラスで松組、竹組、梅組と呼んだ。

二六年三月十日には学校法人松尾鉦山学園が設立され、小学校、中学校そして二四年六月一二日開校された松尾鉦山高等学校（定時制）が一つの経営組織の中に統括され、松尾鉦山学園小学部、同中学部、同高等部と称されるようになった。屋敷台にはそれぞれ分園があった。こうして人口増に加えて、二三年二四年と全国的なベビーブームがまき起こした子どもの数の膨張は、毎年の校舎増築も追いつかないことが必至の情勢であった。遂に松尾鉦業は意を決して、島沼の東北方の山林を切り拓いて、小中高をすべて収容する一大校舎をつくることとした。

昭和二八年（一九五三年）一二月八日粉雪がちらちら舞いおりる日だった。二七年六棟二八年二棟と建てられたアパートの前を何回も往復し、職員生徒みんなで荷物を運んだ。遠くから見ても、きわだって見える白亜の殿堂。本当に本校生徒の限りなき誇りだった。しばらくの間は花巻中学校とともに、中学校



授業風景＝昭和14年頃



授業風景＝昭和14年頃

昭和14年頃



としては県下唯一校だけの鉄筋の校舎だった。わが世の春を謳歌した松尾鉦業も、この好調が続かず新校舎建築は第一期工事を終えたのみで、松尾村に移管することになるのである。

昭和三十一年四月一日、松尾村立松尾鉦山中学校、同松尾鉦山小学校、同屋敷台中学校、同屋敷台小学校の四校として新たな発足をした。こうして公立となった本校は学級数十三



先生—昭和15年頃

子どもたち—昭和22年2月



22.2

新制中学第一回卒業生—昭和23年3月



クラス。六二二名。年度内に校旗を制定し、校歌を制定した。生徒数はどんどん増して、鉄筋の校舎の後に木造の第二校舎が建築されていくのである。三四年二教室、三五年二教室、三六年二教室、三七年二教室と毎年のように第二校舎はのびて行った。岩手郡で唯一の統合中学校だった岩手一中の生徒数が郡下最高の年もあるれば、本校の生徒数が最高の年もあるというように、生徒数では岩手一中と並んで最も多い学校だったのである。

それが昭和三七年秋の松尾鉱業の企業合理

屋敷台分校



屋敷台分校時代の先生 昭和14年6月

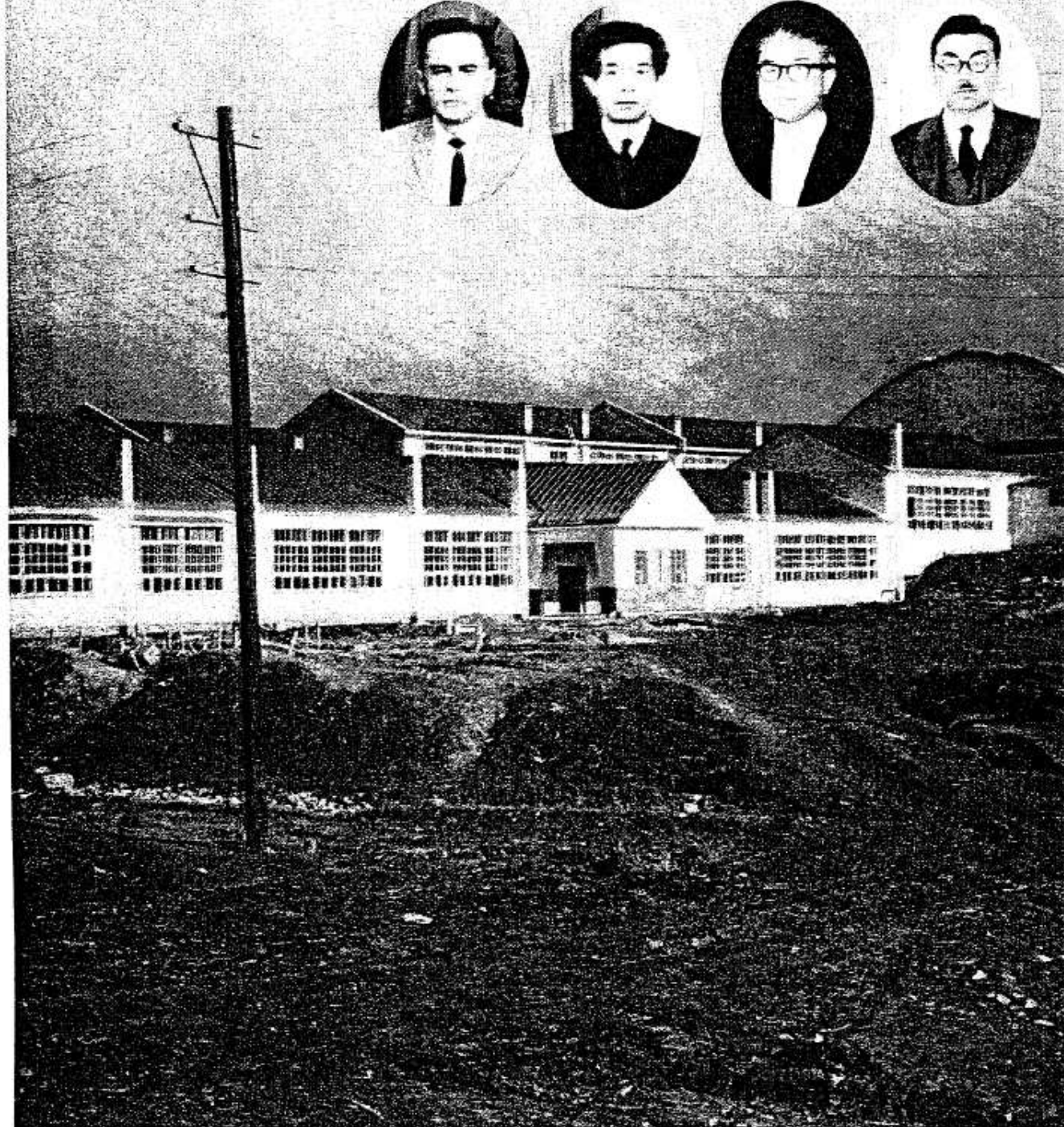
屋敷台分校校舎



屋敷台分校、高等科卒業生 昭和21年3月



化で、希望退職者一、〇八二名も出るにおよび、生徒数は急速に減少し、昭和三八年四月は六百三十名ばかりになった。転校生は二百名に及んだ。その後じりじりと減少し、昭和四二年には五百二十名ほどの生徒だった。これが四二年秋の合理化では松尾鉦山の退職者は八百数十名。それにともなう転校生三百三十三名。昭和四三年四月の在籍は四二年四月のちょうど半分で二百六十名だった。入学する生徒の数も少なかったが四四年春は二〇二名になった。四四年十二月更生計画が出される期限なのだが、これが八月になるとか九月になるとかの噂が、そこちで話されているかと思えば、いつの間にか十月になると言われたりしていた。それが更生計画案提出をみずに、松尾鉦山株式会社の従業員全員解雇という結果になって現われた。松尾鉦山労組や関係各機関、団体の努力の甲斐もなく、退職金一人当たり平均十五万円をもって退職せざるを得ない状態となったのである。十一月十一日鉦山の火は消え、松尾鉦山を象徴した製錬の煙も絶え、索道の音も止んだ。やまには死の静寂が訪れたのかと思われる淋しさである。冬は例年より早く風雪を舞いあがらせている。十二月上旬県外の求人説明会が開かれ職場見学がおこなわれた。職場見学の結果、続々とやまをおりて行った。一月までかかって動く者はおおかた動いた。その後数人の動きがあつて現在九十八名（二月二十日現在）この生徒で修卒業式と閉校式を迎えるわけである。消えゆく運命とはいえ、あまりに淋しい。



公立松尾鉦山小学校校舎  
から初代校長本堂敬三、二代校長近藤新吉、三代校長工藤正、四代校長泉澤巖

松尾村立 松尾鉦山小学校

# 校歌

作詞 菊池 知男  
作曲 下総 皖一

一、黄金花さく みちのくの  
松尾の山の いただきに  
わが家と育つ わたしたち  
黄金の花に なおまさる  
ちえの泉を くみ上げて  
みんな仲よく はげみます



校章

# 松尾鉦山中学校校歌

尾 沢 喜 雄  
千 葉 了 道

作 詞  
作 曲

一、岩手の富士をまなかに  
起き伏す山の深みどり

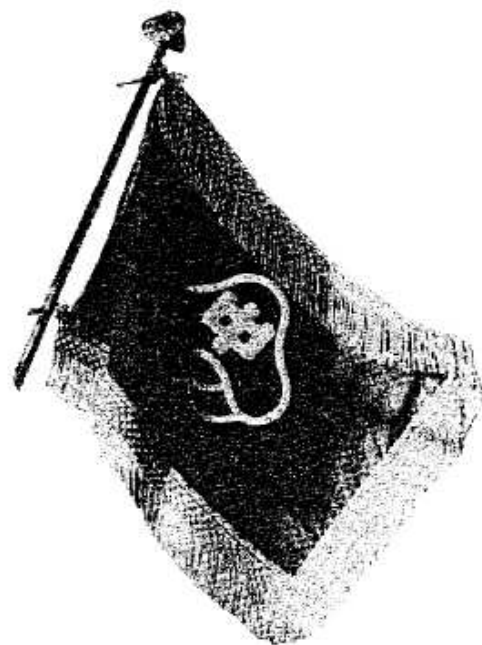
気も澄みわたる頂に  
若き力と希望に満ちて  
わが学舎は建ちにけり

二、春すずらんの香ににおい

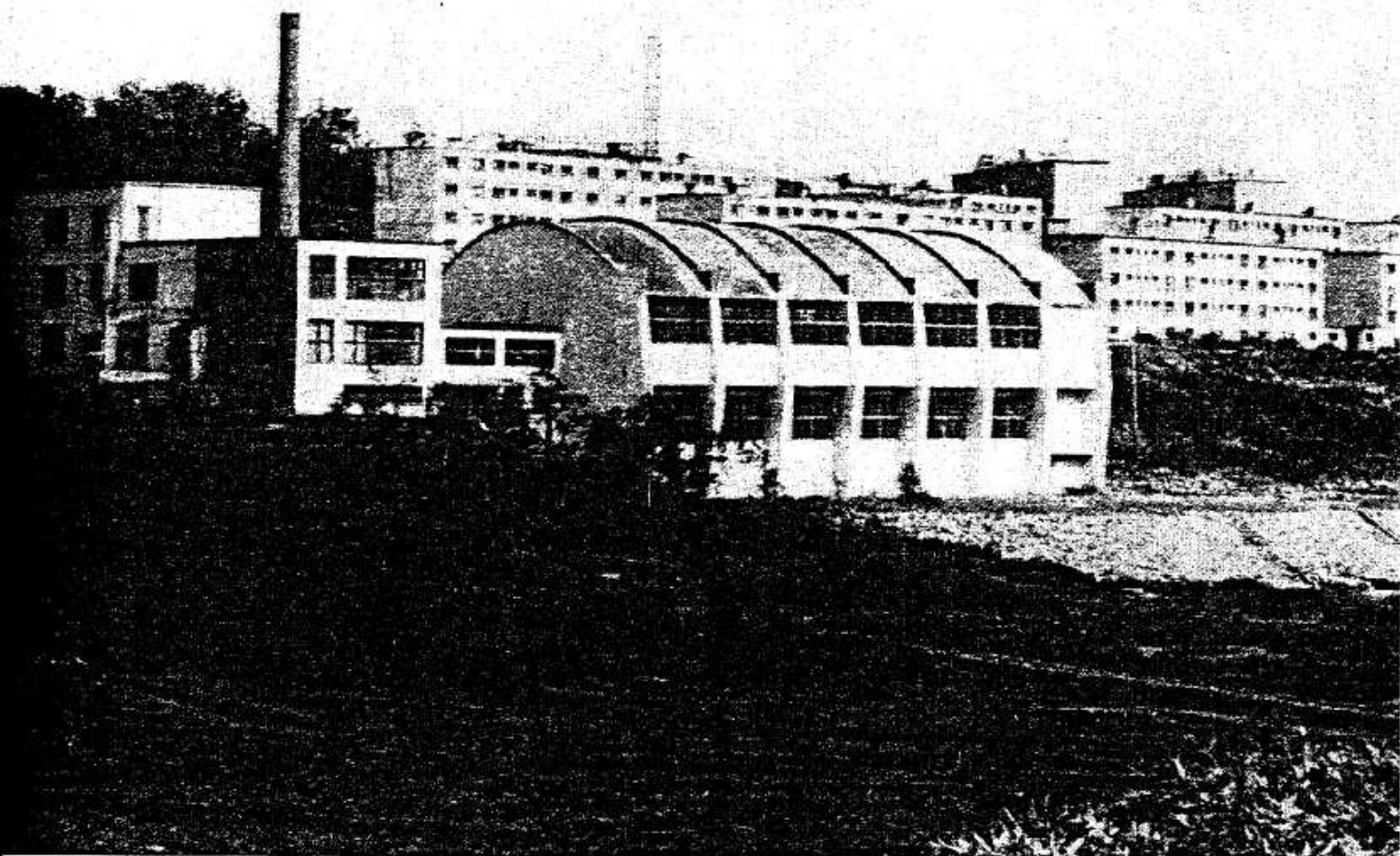
秋はもみじの色はえて  
自然の恵みゆたかなり  
われらむつみて心をあわせ  
三年の業を積み行かん

三、聞け坑道の奥深く

巨岩にいとむのみの音  
いざや不屈の精神もて  
自らを立て真理をきわめ  
栄ある光掲げなん

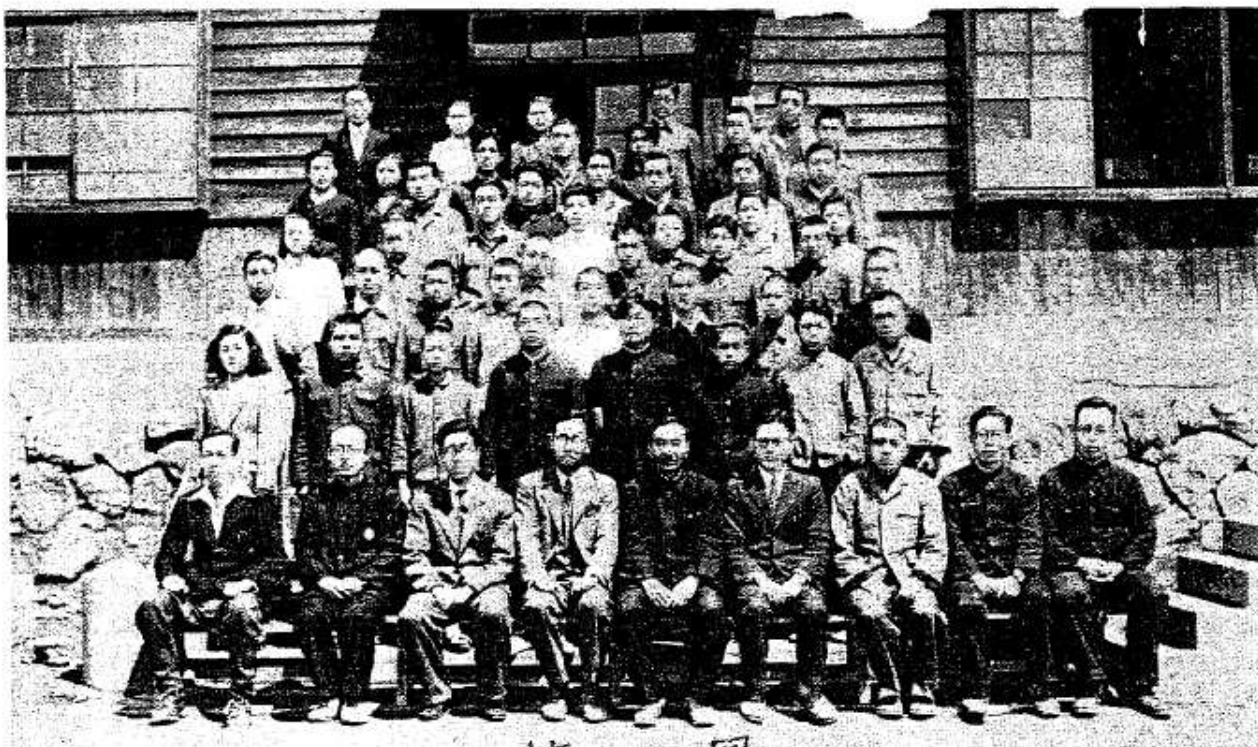


校 旗



# 働きかつ学ぶ

— 定時制 — 松尾鉦山高校



第1回高等学部入学式（元山）＝昭和24年6月

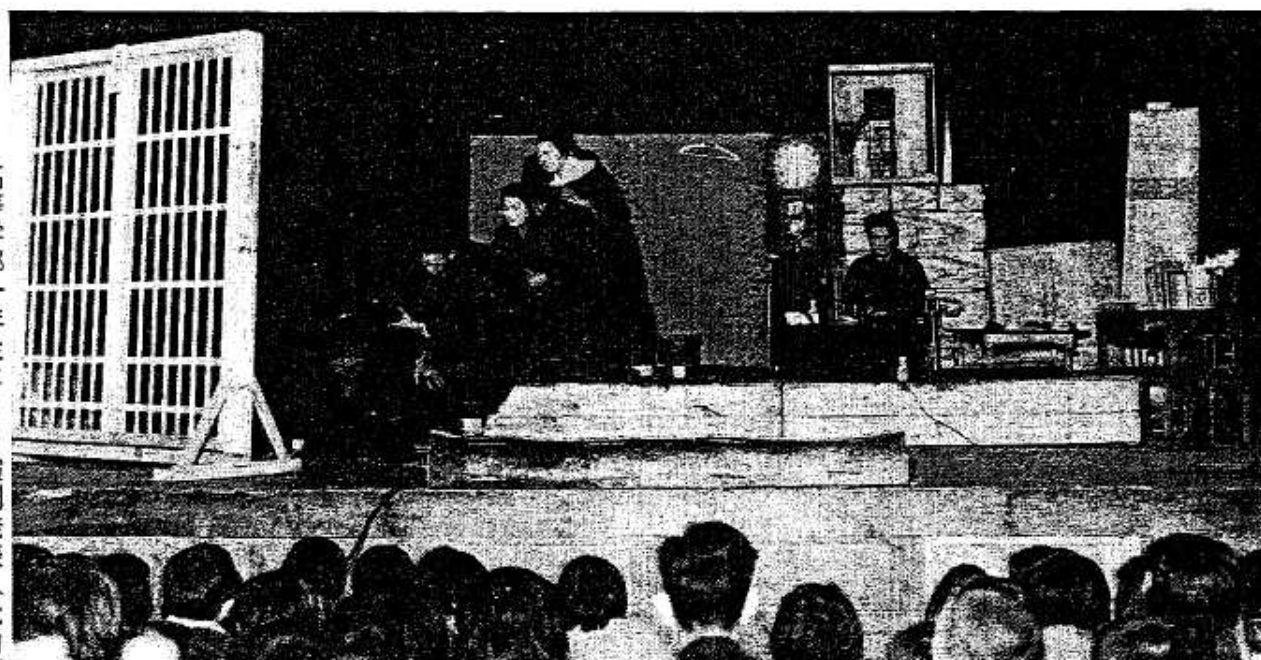
## 高等学部昇格

— 正式の定時制高校となる —

昭和二十四年に設置された学園の高等学部は、三年制の各種学校の資格を有するものであったが、これを四年制の正式な定時制高校にしてみたいとの生徒父兄の熱望に因って、諸計画をととのえ県に申請中であつたが、私立学校審議会の議に附して検討され、その答申にもとづいて、四月一日県知事より認可があつた。ここに待望の正式な高等学校が学園の一部門として出現することになった。

学園では四月十四日入学式が行われたが、学園長から定時制高校へ昇格の歓ばしい報告があり、第二学年乃至四学年生徒はそれぞれ新高校の生徒となり、新高校初入学の一年生とともにその晴れやかな表情は講堂に満ちあふれていた。高等学部現況は次の通りである。

—— 松尾鉦山時報・昭和27年5月



高等学部一年生による演劇発表（元山）  
昭和26年11月